



連載の解説版「もう一つの『発達のなかの煌めき』」第十三回は、こちらから見るすることができます。

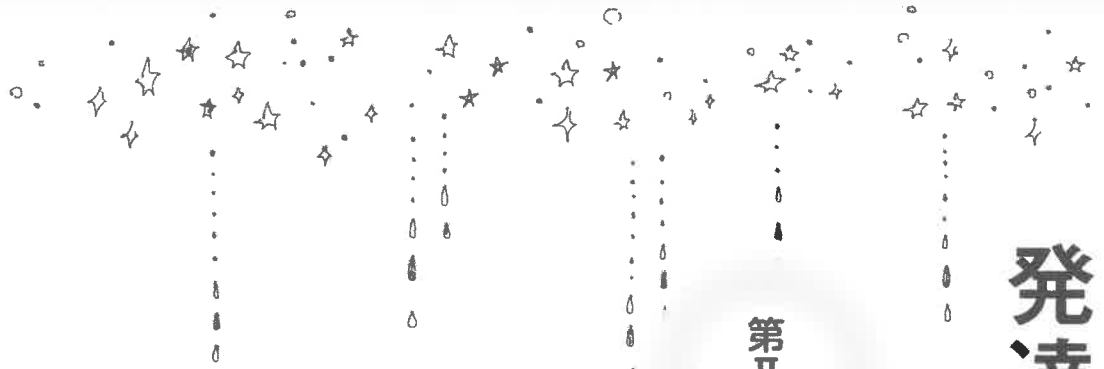
発達きららのなかの

煌めき

第II部

発達の共感が創り出す実践

—歴史に学び、今をみつめ、
未来を創る



白石正久 白石恵理子

しらいし まさひさ / 1957年、群馬県生まれ。小児科病院の発達相談員などを経て、現在龍谷大学名誉教授。

しらいし えりこ / 1960年、福井県生まれ。大津市発達相談員などを経て、現在滋賀大学教育学部教授。

第3回 障害児保育の源流を探る

五月号では、子どもに障害や発達の遅れがあることがわかったときに、親と子が「はじめの一步」をふみだす過程と、その支援について考えました。今回は、保育所等における障害のある子どもたちの保育がどのようにすすめられてきたかを振り返ります。

「保育元年」

障害や発達の遅れのある子どもたちは、幼児期にどこで保育や支援を受けているのでしょうか。一つは、障害のある子どもたちを対象とする、いわゆる専門機関である児童発達支援です。これは、従来、通園施設、児童デイサービス、療育教室といった名称で呼ばれてきました。現在は、法的には「児童発達支援」に位置づきます。また、数は少ないですが、特別支援学校の幼稚部があります。視覚障害や聴覚障害のある子どもたちは、幼稚部に通っている場合も多いでしょう。他方、「統合保育」「インクルーシブ保育」と呼ばれる保育形態の場として保育所、幼稚園、認定こども園等があります。

国による保育所や幼稚園での障害児保育がはじまったのは一九七四年です。厚生省は「障害児保育事業実施要綱」を定めて、タカシくんのお母さんは、市内に二十数か所あった保育所と幼稚園を片端から訪ね歩きます。しかし「受け入れたいが人手が今でも不足している」「他の父母から苦情が出るので」と断られ、ようやく受け入れられたのが一九六五年に共同保育所として始まったつくし保育園でした。もちろん入園は簡単ではなく、園では激しい議論がなされました。最終的には園の基本方針である「①働く婦人の権利を守る ②差別を許さない保育をする ③民主的な運営をおこなう ④地域の保育運動をすすめる」にたちかえることで、入園が実現したと言います。

ちよっとしたすきに園を出てバスで隣の市まで行ったり、友だちの通園カバンをハサミで切ってまわったりと、タカシくんの園生活は「事件」の連続でした。しかし、先生に「大好きよ」と抱き寄せてもらおうのが嬉しくて、お友だちを抱き寄せて「ス・キ・ヨ」と言うなど、誰もが「タカシくんは変わった」と認めるような変化をみせていきます。それでも、先生たちは、彼の一年半の園生活について、保育園に入って本当によかったという確信をつかむまでには至りませんでした。数年後、障害の重い子の入園にあた

め、保母加配の経費を市町村と国が補助する制度をつくりました。また、文部省も「心身障害児幼稚園助成事業補助金交付要綱」を出すとともに、「私立幼稚園特殊教育費国庫補助金制度」を開始しました。対象となる子どもたちはまだまだ限られていましたが、制度がはじまったことは画期的なことでした。それまでは、働くお母さんも、障害を理由に入園を断られるために、仕事を辞めざるを得ませんでした。働きたくても、「現在働いていないから」という理由で入園させることもできませんでした。

一九六七年に、タカシくんが滋賀県大津市のつくし保育園に入園します。お母さんは一日中タカシくんを追いかけまわす生活に疲れ果てていました。当時、動きまわる子どもたちは、家の柱に縛られていることも多く、縛られるがゆえに、なお動きが激しくなるといふ悪循環になりがちでした。田中昌人は、「縛るのではなく、大勢の友だちのなかで、変化しやすい素材を使って力いっぱい遊ぶこと」「発達へのはたらきかけを科学的、系統的にしていくこと」などがどうしても必要と述べています。けれども、そのために必要な場がなかったのです。

タカシくんのお母さんは、市内に二十数か所あった保育所と幼稚園を片端から訪ね歩きます。しかし「受け入れたいが人手が今でも不足している」「他の父母から苦情が出るので」と断られ、ようやく受け入れられたのが一九六五年に共同保育所として始まったつくし保育園でした。もちろん入園は簡単ではなく、園では激しい議論がなされました。最終的には園の基本方針である「①働く婦人の権利を守る ②差別を許さない保育をする ③民主的な運営をおこなう ④地域の保育運動をすすめる」にたちかえることで、入園が実現したと言います。

ちよっとしたすきに園を出てバスで隣の市まで行ったり、友だちの通園カバンをハサミで切ってまわったりと、タカシくんの園生活は「事件」の連続でした。しかし、先生に「大好きよ」と抱き寄せてもらおうのが嬉しくて、お友だちを抱き寄せて「ス・キ・ヨ」と言うなど、誰もが「タカシくんは変わった」と認めるような変化をみせていきます。それでも、先生たちは、彼の一年半の園生活について、保育園に入って本当によかったという確信をつかむまでには至りませんでした。数年後、障害の重い子の入園にあた

タカシくんの入園を実現させた父母や保育者たちの願いは、八年後に花開きます。「大津市障害児父母の会」などが中心になって運動を続け、一九七三年春に、国の制度に先駆けて、希望する障害児の全員入園が実現したのです。大津市は、この年を「保育元年」と名づけ、各園（公立・民間とも）に一名の保母の増員もしくは補助金、さらに巡回専門相談チームが派遣されるようになりました。